

【清水座長】

議事で今のモデル地区の状況というところがレビューをされるということですが、一言で言うと、かなり苦慮しているなというのが正直なところと感じています。地域も、さきほど人の力という話もありましたけれども、いろいろな意味で疲弊しているなというのが最近の私の実感です。思いややる気はあるけれども、なかなか人手がついてこないというところが、企画をしている行政や観光協会、DMOみたいなところもそうですし、それから、そこに実際に事業展開していただく民間企業等も、かなり人手不足で困っているというところがこの一、二年如実に表れてきているなというふうに思います。

一方で、こういうインフラツーリズムの案件も含めて、いろいろな支援事業に取り組もうとしても、受入れ能力が地域になく、見ていられないような状況もある中で、こういう施策が展開をしているということを、まず理解をしないとイケないかなと思っています。

そういった意味で、少しこういうものを無理なく効果的にやっていくようなやり方というのも今後見据えていかないとイケません。予算の仕組みとかそういうものも変わってくると、政策のフォーカスも変わってくるという中で、まさに過渡期に来ているというのが今日の有識者懇談会のベースではないかなと感じているところですので、そういうことも含めて忌憚なく意見をいただければ幸いです。

【アセットマネジメント企画調整官】

まずは、4ページになります。全国の6か所のモデル地区が動いています。具体的な取組内容としては、5ページ目に記載させていただいて、一覧表で記載させていただいております。

6ページ目に各モデル地区で取り組んでいる令和6年度の内容について示しております。令和5年度の選定箇所は、過年度から取組が進められており、令和6年度も継続して進められています。関係者の打合せなどを経て、モニターツアーなども実施しております。また、ほかの観光資源との連携などを軸にした取組や、資料館を活用した取組については、施設の改修なども行っています。

また、外郭放水路は、さらなる発展に向けた検討を進めております。バスタ新宿、温井ダムに関しましては、体制構築の準備やコンテンツの検討に向け意見交換などを進めています。

各モデル地区の状況について説明します。7ページ、青い池と十勝岳火山砂防情報センターの取組では、施設管理者と町が連携して取り組んでいます。また美瑛町、上富良野町の2町が構成団体である十勝岳のジオパーク推進協議会が設置されております。この推進協議会と連携して、現場見学やツアーの企画などを行っています。

戦略としては、十勝岳ジオパークと連携したインフラ・ジオツーリズムの実現を目指し、コンテンツ開発に取り組んでいます。北海道開発局も含め運営体制、受入れ体制を構築し、ジオツーリズムで伝える火山防災と地域をつなぐようなコンテンツを企画しております。地域の狙いとして地域消費額を増加させたいという思いがあり、周辺観光資源との連携を軸とした面的なコンテンツの造成に至っています。

9ページ目、大源太川第1号砂防堰堤です。施設管理者の湯沢砂防事務所と、町、運営補助としての観光まちづくり機構、民間事業者の雪国観光舎がコンテンツの運営、という形で取組が行われています。

戦略策定としては、インフラ施設の規模を踏まえながら、周辺の観光資源と連携し、特に湯沢町の宿泊客が多いという特性を踏まえて、チェックイン前後に合わせたコンテンツを検討しております。また、砂防施設の利活用協議会などを活用した受入れ体制をベースに、雪国観光舎による販売体制の確認と、提供商品としては、e-bikeで移動手段を活用しながら、地域を広域に周遊するコンテンツとして造成しております。

地域の狙いとしては、関東圏からアクセスしやすいけれども、日帰り客が多かったりするような状況がございましたので、宿泊につなげたい、滞在時間を延ばしたいということでございます。

有料ツアー造成に当たっては、周辺観光資源との連携として、地域のストーリーのあるツアーについて検討をしております。また、過去の改築でつくられた仮排水トンネルがあり、安全性を考慮して、通常では入れませんが、視点場として、こういったツアーに合わせて入ることが出来ます。そこで説明できるよう、ガイドを補助する資料を作成しております。三つ折りになってポケットに入るようなサイズに加工して、現地で配布できるようにしております。また、バイク、自転車に乗りながらサイクルルートで、周遊観光資源をめぐりながら、こちらを持っていたいて、地域について学びながらインフラも学ぶというような取組となっております。

続きまして、11ページ目、亀の瀬地滑りです。大和川河川事務所が施設管理者であり、日本遺産の龍田古道・亀の瀬の推進協議会、大阪府の柏原市、奈良県三郷町と連携している取組です。

協議会の中で施設のガイドの体制などを構築しながら、新しい資料館で、地滑りの歴史や対策の内容の発信とともに、地域の商品の販売なども行っているようなところでございまして、観光拠点として活用できるように整備します。

地域の狙いとしては、地域の面的なにぎわいです。日本遺産に認定されて以降、地域の関係者や住民が活発に活動しており来訪者を増加させたいということと、事務所は、地域の思いに応える形で、観光視点で楽しく事業説明を行うため、有識者の助言を踏まえ新たな魅力的な資料室を整備しながら、見学者のスペース不足も解消を進めています。

また、これまで事務所職員が案内した見学会は、地元住民によるガイドで行われています。ワークショップを重ねながら、新資料室内の地域ショップの販売ですとか、敷地内を活用したイベントを実施しています。

13ページですが、今回、施設の特徴として、単独で大規模な施設はありませんが、例えばジオパークや資料室など関係している施設が点在しております。こうしたことから、モデル地区では、インフラそのものの施設に加え、資料室や周辺の観光資源なども活用しながらコンテンツ化が進められてきました。

取組の成果・課題としては、インフラそのものの魅力だけではなくて、インフラの物語、なりわいから、地域がどうまちづくりで形成されていったか、どう防災に役立っていたかということを楽しく伝える仕掛けが非常に重要であろうということで、この3地区それぞれ取り組んでおります。また、単独施設だけで難しいところは、周辺観光資源や観光コンテンツの連携も行いながら魅力をさらに向上させていくことが重要と考えています。

一方で、収益型のインフラツーリズムを実施する場合においては、観光コンテンツ化にあたり、持続的にやっていくために、金額の設定が非常に重要になってきてまして、観光客が期待するような事前の期待や支払う金額に見合う価値を提供するためのコンテンツを磨き上げていくことが重要と思っておりますが、磨き上げにも相当なコストがかかりますし、提供するツアーの金額が過度に大きくないようにするような注意が必要と感じたところでございます。

また、インフラを活用したい地域があって、インフラ管理者がそれぞれ相互に連携して、こういった検討を重ねてコンテンツを磨き上げていくということが非常に有効だということがまとめとしてございます。

まずは、以上でございます。

【篠原委員】

まず、総論でいきますと、いろいろ取組のお話を一生懸命地域とやりましても、なかなかこれ以上難しいなというところも見え隠れしておりますから、どんどん卒業し、新しく参画いただくような仕組みを回していかないといけないと思います。

その中で私が担当させていただいた美瑛でございますが、インフラをどのように活用していきたいのかというようなことを含めて進めてきました。

砂防施設をどうやって観光資源にするかということについては、火山の噴火によって大変な被害が出るということ、火山対策や国土交通省の防災の技術というものをいろいろ広げて伝えていきたいということがまずベースにありました。

美瑛町は御存じのように、オーバーツーリズムで課題を抱えています。砂防施設のすぐ下に白金温泉があり、噴火の力で泉質がいいというお話とつなぎながら、宿泊を促進して、地域の周遊をつなげていこうと取り組んできました。

施設の展示については、観光をベースにして、防災を説明するフロアや、立体的に見える動画などいろいろ出てくるようなものにしています。入場料を取るような仕組みにしたかったのですが、そこまでのレベルにはなっていないので、継続して観光庁の事業等も活用し、発展をさせていく予定です。

このように、一定程度、地元のほうにバトンタッチができて、あとは自走化をしていただくお手伝いをしていくという流れになりそうでございますので、これはもう卒業できる、完成度が非常に高いものになったと考えております。

【河野委員】

亀の瀬に関しては、資料室をリニューアルし、インフラツアーを掛け合わせるということができました。この資料室に加え、排水トンネルと明治期のトンネルを組み合わせるとガイドが案内をする通常のフルスペックツアーが90分。また、短めの45分のコースもつくり、今はガイドの育成期間でもあるので一旦無料ですが、次年度の下半期から、有料化に向けて体制を整えるというような状況にあります。また、90分コースでは常時アンケートを取得し、改善に努めるためのマーケティング体制を整備しています。

資料室が1年前にオープンしてからは、ふらっと来た人を合わせて、既に2万人は超えていると聞いています。このエリアは、もともと観光ニーズはほぼゼロで、宿泊施設もないということもあり、来てくれる方の9割は、奈良県・大阪府からの方です。この資料室の中で、日本遺産と絡めて、いろいろな地元のオリジナルグッズを開発し、限られたスペースながら物販もすることで、これを運営していく事業者が手数料で商売できる機会を増やそうということもトライしていますが、物販系は単価の安いものを中心に売れるということもわかってきております。

収益化に向けては、地域をまたいだ広域のツアーをつくるとともに、さらには、将来的なインバウンド誘致を見据えたモニターツアーを実施しました。

国内の「大人の社会見学」的な日帰りコースは、大和川の上流から下流までのコースの真ん中に亀の瀬を入れて、治水の「止める」と「ためる」と「流す」の施策を川の流れに沿って観る・知るというもの。また、国内の訪日ランドオペレーターを招致して実施したものに関しては、外国人のニーズを踏まえ、法隆寺や宿坊、ワイナリーなどのカルチャーも加えています。作り込んだ要素としては、法隆寺のガイドに特別に依頼をし、通常の歴史ガイドではなく、まちづくりや建築などの土木と絡めたシナリオにし、そこから防災とまちづくり、龍田古道という3つの話を繋

げています。

もう一つは、今後土木を目指す大学生向けのツアーとして、県内を広域で回り、より専門的な説明を行うモニターを実施しています。大学生向けのものは収益化しにくいコンテンツですが、産業の発展やリクルートという側面も含めて重要と考えています。総じて、ツアーの有料化はまだ実現していませんが、今後を見据えて着実に取り組んでいます。

課題は、先ほども挙がっているように人の問題が最大です。施設やツアーの運営体制が整っておらず、地元で運営・オペレーションができる専門人材や企業の不足です。地域旅行会社がいわけではないのですが、人材不足や、旅行会社の経験値の不足から、インフラツーリズムというものを正しく理解してコンテンツをつくる力が足りないことが致命的です。また、地域旅行会社が販路を持っている大手旅行会社とネットワークが薄く、代売交渉ができていません。比較的大規模な旅行会社に直接造成・販売を依頼する場合には、確実に売れるかどうかわからないインフラツアーに対して、旅行会社に限られた人材の中でコストをかけて自腹でコミット頂くことの難易度も極めて高いです。

観光地でなかった亀の瀬がここまでの形をつくることができたポイントはいくつかあると思っています。

1つは、インフラツーリズムと絡めることができる予算を複数持っていたということです。例えば、今年度は日本遺産協議会で文化庁の事業予算を獲得し、モビリティの実証をするなど、コンテンツ造成に関する検討を複層的に実施できました。インフラツーリズムと日本遺産事業はコアメンバーが同じなので、常に情報や取組を連動させながら、予算を2階建て、3階建てで獲得してやりたいことを押し進めようという能動的な意思と戦略が非常に重要です。

現地の推進体制は、大阪府柏原市、奈良県三郷町、国交省大和川河川事務所が日本遺産龍田古道・亀の瀬推進協議会の構成員となり、三位一体の体制が構築されています。担当者の異動があっても熱意を持ってずっと取組を続けられたという体制の強さも、取組みが中断せず加速していることの理由の1つです。

あと、もう1つは、砂防事業（亀の瀬）と流域治水が深く関係していることから、流域治水の取組も、インフラツーリズムと資料室の展示に掛け合わせていくことができました。それぞれの担当者が組織をまたぎ連携を深めていることで、日本遺産と砂防、流域治水の3点を絡め、深い内容を伝えることができています。この3点を取組の核として、伝えたいことと取組みたいことが現地ではまだたくさんあり、今後も自走で進むと思います。

これだけ主体者の体制が整っていてもここまでの推進は非常に苦労が大きかったので、モデル地域を選定するに当たっては、2カ年の短期間で今から何をやりましょうかねとスタートするよりは、ここまで完璧には言いませんが、ある程度体制が整っていて現地側の意思が明確でないと、スムーズな事業推進には限界があるということを強く感じました。

【清水座長】

私からは、私の見ている範囲で大源太川の状況を説明したいと思います。

この砂防堰堤は、湯沢の中心部からそれなりの距離があり、また冬は雪の影響で通年化が難しいエリアです。

それから、インフラのサイズがそれほど大きくありません。砂防堰堤の補強工事時に建設したトンネルを見学ルートにして、出口から砂防堰堤の美しい景観を見るところは非常にすばらしいのですが、解説を展示ができる場所がなく、オペレーションが難しいと思いました。

また、一からスタートしたところでもあり、まずは、関係者の方向性を合わせていくところに苦慮しているような状況で、まだ解決していないように私自身は感じています。

また、商品性を考えている雪国観光舎は、人が少なく仕事量が多いこともあって疲弊をしており、インフラツーリズムだけに集中できないという点もあります。一方で、町のDMO法人は調整役に回っており、この体制で本格的に今後進めていけるかどうかは、様子見だと思います。

とはいえ、できることを組み合わせないといけないので、地域で力を入れているサイクリングのようなコンテンツ資源と合わせ、サイクリングツアーのようなものをコンテンツの一つとしてどうやって入れていくか。また、どのぐらい現場が開放できると、トータルとしてそれなりの存在感も示しつつ、需要がありペイするか、というところが今後議論する点と感じています。

この辺の体制については私としても注視したいところです。

【篠原委員】

長年インフラツーリズムを地元とやってきましたが、インフラツーリズムとして取り組みたい思いと、地域がついてこれるということ、さらに地方創生へ道筋も含めた枠組みが組めない限り機能しないと思います。

外郭放水路では、激甚災害が増える中、命の守り方について、観光を通じてしっかり伝えるんだということと、埼玉県と外郭放水路を核としてどうやって周遊させようかということがありました。根本的に伝えたいものをそれぞれの地区で見つけておかないと、インフラツーリズムが成り立たっていかないと思います。

【河野委員】

亀の瀬もそうですが、例えば外郭放水路のように、実際に目で見た迫力で圧倒できる資源ではない地域において観光的な面白さ・満足度を与えるには、ガイドの力量が非常に重要になります。

【清水座長】

大源太でも、単体で多少はきれいに見えるけれども、それ以上でもそれ以下でもないというインフラであり、少し大きなストーリーを作る必要がありました。当初から提案していたことは、砂防堰堤のおかげで、湯沢にある東京と新潟を結ぶ幹線を守っているというところのストーリーを絡めないと厳しいということでした。

また、現場だけでなく、例えば、仮に、山の上に登って、地形を見ながら、砂防堰堤の施設や施設が守る全体像を説明するところまでやらないなどしないと厳しい一方で、現地で何とか短期間で形にしないといけないという制約もあり、取りあえず、今はこういう形になっています。

2、3年で卒業させるというスキームでやっている限りは、こういう形にならざるをえないと思います。

【河野委員】

亀の瀬は、文化財として保存していた明治期のトンネルの一部に、プロジェクションマッピングを「映えスポット」的な感じで活用することで、インフラにそれほど興味ない人も、それを目当てに足を運んでくれます。ツアーの中でインフラや治水の説明をした最後のクライマックスでプロジェクションマッピングを見る、という順序です。プロジェクションマッピングを目当てに来た人たちに「実はね」と言ってインフラの説明ができるということでインフラに興味がない人がインフラを知る「きっかけ」を作れましたが、プロジェクションマッピングの「引き」がなかったら誘客もマーケティングも厳しかったと思いますし、ガイドの育成の労力もさらに大きかったと思われます。

【観光地域振興課長】

インフラを担当している側からすると、お伝えしたいメッセージが常にあって、人の命を守る、そして生活を守るという点をぜひ理解してほしいという思いがあります。

一方で、観光は、観光客に来ていただき、お金を落としてもらわないと成り立たない。来る方々が来てくれるかどうかという視点から考えるのが観光になります。そうすると、その「メッセージ」が売れるのだろうかという、そういったところをいかにして融合していくのかというところが重要です。

【篠原委員】

観光全般そうなのですけれども、特にこのインフラツーリズムというのは、マーケットインとプロダクトアウトという言葉キャッチフレーズぐらいにして、今後、物語の設定から考えないと回らないのかなというふうに思います。

【阿部委員】

施設種別として、今まで橋梁やダムが中心だったところを、令和5年度は、砂防でやってみようということだったかと思うんですけれども、モデル地区としてやってみて、施設種別がインフラツーリズムに大きな影響があるのか、あるいは地域性なのか、地元の組織なのかというのは分析してもいいのではないかなと思いました。

もう一点は、まちづくりや地域振興側から見ると、インフラツーリズムがコンテンツの1つとして地域振興の推進に寄与しているのか、あるいはインフラツーリズムがまちづくりや地域振興の牽引や右となっているのかというあたりも見てみるといいと思いました。

さらに、インフラの技術が来訪者にとって面白いのかというのは、インフラの理解を深めるストーリーをどう商品化するのかという話と、インフラの非日常を体験してもらうほうに力を入れるのか、当然両方でしょうけれども、バランスというのか、あんまりインフラの理解・理解と押しつけがましくしても、来訪者からはそういうつもりで来たんじゃないんですという話にもなってしまいます。一方で、それをやらないで、「すごいでしょ」と見せていても、インフラツーリズムの枠組みでやるにしては、ちょっと違うかなと感じますので、そういう整理をしてもいいと思います。

【篠原委員】

まさにマーケットインとプロダクトアウトすよね。

日本の土木技術は本来もっともっとPRしたいところなので、そのメニューはそのメニューで、観光とはちょっと違う角度でそれぞれつくれるのかなと思います。分析しながら、受け入れられるような仕組みというものを、同じものを見せても、観光用とそうしたものと分けていくといけるかもしれないなと思いますね。

【清水座長】

今は、どちらかというと「倍増プロジェクト」というように、裾野を広げるということになっていると思います。だから、今までの議論でそういう仕立てでいいかどうかというのが問われているかなという感じがします。

【アセットマネジメント企画調整官】

続いて、令和6年度に選定されたモデル地区の説明をさせていただきます。

外郭放水路につきましては、狙いとして、災害の自分事化10万人目標ということで、来場者数の増加を目指し、ステップアップさせたいという中で様々な取組、インバウンド向けなどに取り組んできたところです。

続きまして、こちらバスタ新宿でございます。現在、バスタのインフラツアー、プラス、地方誘客の運用ということで検討を進めているところでございます。

次に温井ダムです。湖面利用している既存の企業・団体と連携しながら、ダム内部の見学を地域関係者にも開放して、観光コンテンツ化を目指すための体制の構築に向けて調整をしているところでございます。

18ページ目にモデル地区全体の総括を記載しております。令和5年度選定箇所は、おおむね地域主体のツアーが開始されており、自立的に取組を進めておりますので、社会実験終了と考えております。温井ダムとバスタ新宿につきましては、まだ体制構築に向けた調整などを進めているところですので、引き続き7年度もモデル地区としての取組を継続したいということで考えています。

外郭放水路につきましては、地域が主体となった観光コンテンツ化が実施されたというところは既にクリアしている中で新たな取組を進めていますので、もう少し様子を見ながら、取組の成果をフォローアップした上で、新たにどうするか、卒業などを考えていきたいというふうに思っています。

19ページ目に、過年度含めての総括を記載しています。新しくインフラツーリズムを進める中で、インフラツーリズムを担う民間事業者さんとの連携ということで時間を要しており、民間事業者側の課題があると考えています。3つの例として挙げさせていただきましたが、例えば、マンパワー不足や、同種の事業に関わったことがなくノウハウが不足している、有料ツアーでは失敗する可能性もあって、リスクを取ることが困難といったような課題があると考えています。

また、今後インフラツーリズムに取り組もうとする場合には、このような課題に直面することが想定されますので、民間事業者にもインフラツーリズムに取り組むメリットや好事例なども紹介しながら、参画を促すとともに、管理者側にもこういった知見を示しながら、連携の進め方についても共有を進めたいと考えております。

以上でございます。

【篠原委員】

外郭放水路については、5、6年前に無料だったものを有料化にし、5万人ぐらいの集客がありました。これを倍増させようということで、国土強靱化とか命を守るという話をベースにドラマのような仕立てにもう一度していこうということで1年間進化させ、8つのパワーアップに取り組んできました。人件費が上がっていますので、付加価値をしっかりとつけ、入場料を確保し、持続可能になるような仕組みというものができました。

もう一つは、バスタ新宿です。

ここのインフラとしての特徴は人工地盤です。国道20号の中にこのバスターミナルがあるということを伝え、日本のインフラ技術を世界に発信したいことが切り口でした。

しかし、民間事業者は、バスタを観光資源にしバス旅を促進しようという意欲は当初ほとんどありませんでした。そこを今後、地方都市とバスをダイレクトにつないで、出た先のエリアから地方の路線に乗ってもらって周遊できるようにするという構想を考え、国土交通省が協力をするという立てつけにしたところ、事業者からぜひ乗らせていただきたいということでうまくつながられました。

私が事業者に提案したのは、バスタ新宿が地方都市とつながるという仕組みをPRし、世界中

の方々がバスタ新宿発のバスに乗ってもらうような展開にしていこうじゃないかということです。また、事務所も、ツアーも楽しくできるように、一生懸命にガイド部分の運用等の検討をすすめていただきました

それから、温井ダムですが、新たな展開として、歩道の整備や、湖面の活用の活発化という動きがありますので、このような点を踏まえてアドバイスしていくというようなことをございます。全体を通して、このインフラツーリズムは、国の大きな方針ですが、何かインセンティブ、現場の皆さんが頑張れる仕組みというのを考えていかないといけないと思います。そうしたモチベーションを上げるような仕組みにする必要があると思います。

【河野委員】

インフラのツアーやコンテンツをつくるというのがこれまでのやり方でしたが、そのインフラを使ってどんなビジネススキームが組めるか、という事業構築自体を支援する方向に変わってきている印象です。ただツアーをつくれればいいということではなく、持続可能なビジネスとしてどのようにインフラを活用するか、どのポイントで収益化をするかの仕組みごと考えていかないといけないというような段階に進んできたのだと思います。そう考えると、「土木広報から収益化に進みましょう」だけではない事業の建てつけの仕方も考えられることになるので、インフラツーリズムの目指すゴールに向かう個々の案件における手法の多様性が求められ、これに連動すると「推進の手引き」も、もっと考え方が広がっていくことになるかもしれません。

【篠原委員】

私は、ベースは手引きにある大きなストーリーをまず実施することだと思います。地域によって条件が違いますよね。実際のところ、受ける回しの仕組みを考える上で、DMOか旅行会社が担う場合にも、個人型でどうやって楽しく見せる仕組みを、ノウハウが必要ですが、つなげていけるかということだと思います。

【阿部委員】

バスタのお話を伺っていると、インフラツーリズムの枠組みをどう広げていくかという話に展開していていると思うんですけども、バスで地方に行った先でもインフラツーリズムが絡んでくるとまたいいかなとは思っています。

今まで、インフラツーリズムはインフラを見せて売っていたのが、今後、こういうプロジェクトや計画、仕組みを売るといふか見せる、これもツアーになっていくのではないのでしょうか。

【篠原委員】

我々委員はなかなか変わらないですけれども、人事異動で担当職員が変わる中でも、きちんと回るような仕組みを考えるようにする必要があります。

そのために民間をどうやって入れて金を回せるかということだと思うし、こうした仕組みというものを、ちゃんとビジネスモデルを描いてうまくつなげるということだと思いますね。

【清水座長】

インフラツーリズムも地域課題を解く道具の一つであり、地域課題にちゃんと寄り添える形でこの事業は展開しないといけない。たまたまインフラツーリズムに関わった人が、たまたま仕掛けて異動後に進まなくなるというのを繰り返さないように、地方側のやりたいものに合わせていくという観点は非常に重要です。ベースとしてたくさん人が来ているとか、アクセスがいいみた

いなどころしかインフラツーリズムが成立しないという誤ったメッセージを送ってしまうことになる。

インフラツーリズム自体も二層化し、裾野を広げている先鋭的な役割を持っているグループと、一からつくるグループ、ただ、時間がかかるのでノウハウがちゃんと手引きで蓄積されていくというようにと、うまく分けて議論しないといけないと思います。

【篠原委員】

過去に卒業したモデル地区でも、今度、もう少し地域全体の活動として再構築したいというような地域もある。来年度は、以前のように、過去のモデル地区の皆さんをもう一回集めて、交流して課題解決しよう。そういうことをやっていったり、我々も頑張るところには応援をしてあげたりと、こういうことも、来年度に向けましてはちゃんとつなげていかなきゃいかんだろうなと思いますよね。

【アセットマネジメント企画調整官】

社会実験終了については、先ほど御説明させていただきましたが、委員の御意見を伺って決めたいと考えております。

【篠原委員】

一応、重点的にやるのは終了にしてもいいんですが、さっき申し上げたように、継続的に関わってやっていかないと、多分これは回り切らないと思います。

【清水座長】

そうですね。だから、あとは、ちゃんと現場の努力で、ここでやったことというのは、ちゃんと5年、10年続けているかどうかというのは定期的に見ますよということが必要であり、卒業ではなく集中支援が終了ということでしょうか。

【河野委員】

推進状況のチェックも含めて、チェックと支援のダブル体制ですね。

【公共事業企画調整課長】

過年度のモデル地区でも、もっと磨かないとまだ中途半端なんじゃないかというようなことをお見受けしましたので、御提案いただいたような話も、そこから得られるものとか、横展開していろいろ使えるものとか、そもそも何かまだ気づいていない部分もあるような感じもしますので、どういうストーリー性が、みたいなどころもあるでしょうし、いろいろな観点があります。どうしても我々土木の人間だと、インフラ、インフラみたいになりますが、そうではないところについて多く議論いただいたような感じがしますので、ぜひそういったところ、これまで携わったところについては、再び全体を見た上で何か御意見をいただければいいかなというふうに思いました。

【清水座長】

卒業したとしても、例えば、違う事業でこういう地域に関わっていたりもしますので、そういう立てつけでも継続的に、職員は異動するかもしれないけれども、見ることはできるということはありません。

【篠原委員】

外郭については、成果を問われると思いますので、卒業したとしても、ちゃんと継続的に見る必要があります。温井については、卒業の方向にするか、これは状況を確認した上で決めたいと思います。

【清水座長】

令和5年度から始まったモデル地区は3つ卒業で、外郭はさきほどの議論のような感じの取扱いで、バスタは基本的には継続で、温井は状況を確認した上で決めるということにしたいと思います。

【アセットマネジメント企画調整官】

続きまして、議事3ですが、インフラツーリズムのさらなる拡大に向けてということで、論点1、論点2、そして3番の部分について、子供向けについてまとめて説明させていただきたいと思います。

まず、21ページを御覧ください。「さらなる拡大」ということではありますが、本日、委員からも御指摘がありましたとおり、施設の状況や地域性によってインフラの特徴も違いますし、こういったところが有料化できてより成功しやすいのかですとか、また支援期間が短いのではないかと、いろいろな御意見がありました。

これまでの魅力倍増プロジェクトの中でも、いろいろ分類していくと、インフラ施設の有する条件やポテンシャルが非常に重要だと思っています。そういう中で、まずは、こういったものがインフラツーリズムの有料化が可能かどうか、もしくは、いろいろな分類分けなど整理していきたいというふうに思っております。

特に今回、今までやってきたような地域と連携して、観光コンテンツ化、有料化を実現するための必要な条件、ポテンシャルなどについて、まずは整理していきたいと思っています。そのために考えられる条件としては、例えば、地域の意識、インフラを観光資源と捉えるような意識があるかどうか、管理者もそれに対して応えられるかどうかですとか、施設の規模感に依拠して、いろいろやり方はまた変わってくるかなというふうに思います。あとは立地条件。そして、予算がちゃんと確保されて取り組む意欲があるかどうか。

こういった観点が重要ななと思っています。そういったことに各インフラを少し整理・仕分しながら、こういったところで今後しっかりとした支援が必要かどうかというところを考えていきたいなというところでございます。

22ページ目になりますが、少し数が厳選されてしまうけれども、裾野を広げるという取組も非常に重要と考えています。有料コンテンツとしては難しいけれども、違う手法において、土木広報という観点では取り組んでもよいのではないかとこのものがあって、先進事例もありますので、いろいろなポテンシャルのインフラに合わせたインフラツーリズム、インフラの広報について検討の必要があるのではと思っています。

例えば、新たに地方公共団体で、いろいろ土木広報も含めて取り組んでいるような事例がありますので、そういったものを効果的に幅広く発信したりしながら、模範的な例を示して、自発的な取組につなげていきたいと思っています。

続きまして、最後に、子供向けインフラツーリズムの検討です。特に今、外郭放水路もそうですが、子供向けに対して訴求力のあるようなコンテンツを準備しています。防災学習もしくは探究学習という観点での取組は非常に重要と考えています。

「こども未来戦略」においても公共インフラの子供向け現場見学の増加など、有意義な体験の場を提供するというふうに位置づけられています。建設業界からも担い手確保の観点での期待があるという中で、今、大人向け中心にやっていますが、子供向けも含めて知見が必要ではないかと考えています。

25ページになりますが、今後検討していく中で、いろいろ民間鉄道会社ですとか航空会社、工場などでは、国土交通省であまりやっていないような取組、有料でも付加価値をつけて見学会などを設けているような例もございます。有料という場合もありますし、そういった中で、今後、子供向けインフラツーリズムについても少し検討していきたいと思っております。

例えば、既存の例として、探究学習、マインクラフト、あとは展示の観点での工夫、広報の観点での工夫などありますけれども、今後検討するに当たっての視点について御意見をいただきたいと存じます

【篠原委員】

国交省としてぶれてはいけない点は、手引きの中で、今までの見学会に付加価値つけて分かりやすくして、それを地域の観光にも資していくということを示しているの、専門性の部分だけでいいという話にはならないと思います。

そうすると観光立国を実現するポテンシャル等の議論になります。論点2は、土木広報の話であって、同じインフラでも観光活用だけでなく、土木広報にも活用できる。コンテンツを検討するときに、マーケットインを考慮し、技術者が満足できるような御案内の仕組みや資料を用意できるのかという議論をする必要があるの、土木広報は別途という話にはならないと思います。それから、子どもの話についても、楽しく遊べるような仕組みというのは、さきほど同じような観点でアイデアを入れていくということです。特に今高校や中学は探究学習の行き先に困っているようです。しっかりと事前の勉強のための教材や、子供たちへのアフターフォローの意識づけなど出させてあげることが重要です。

防災教育の観点からでもできると思いますが、ある程度、形を決めていって、パターン化していったら、そのパターンをユニットみたいにそれぞれのインフラに適用するようなことはできるかもしれませんが、ただ、大本となる原本のシナリオに費用が若干かかってくるので、予算が必要になります。

これも子供だけの部分、専門でということじゃなくて、手引きの部分をしっかり守りながら、そこに付加価値として考えるということなのかなというふうに思います。

【河野委員】

論点について述べさせていただきます。

1については、先ほどもお話がありましたが、立地特性や物件の特性によって、頑張れば絶対に人が呼べるタイプのインフラと、そうではなく一からつくっていくところがあります。その中でも、地域内に複数の観光資源がある中でのワン・オブ・ゼムとして位置づけられるインフラなのか、今回の亀の瀬や日下川みたいに、観光資源がなくてこのインフラを何とか核としてつくっていくという必死さがあるところで、取り組みの仕方は変わってくるでしょう。

支援の仕方についても、フェーズが変わってきます。地方部だとビジネススキームをつくる以前の問題で、どういう体制で進めるかからのつくり込みになってきます。そういう対象ごとの対応の違いはありますが、特に必要な条件やポテンシャル等について申し上げると、そのインフラがその地域において数ある観光資源の仮にワン・オブ・ゼムだったとしても、そのインフラがあることで歴史的に地域になりわいが続いてきたという、地域の物語の比較的コアのところにある

インフラの位置づけや存在があるかどうかという点で、地域の様々なプレーヤーの理解度や思い入れに結構差が出ているというのを、各地を見ていて強く感じます。

そういう地域においては、地域の成り立ちや歴史・生業を伝えていくときに欠かせないものとしてのインフラは、物語を構築する上で自然に組み入れられますし、積極的に知らせたいという熱意も大きいです。地域学習の中でも、そういうところに4年生、5年生ぐらいの学年が来るようなものになっていることもありますので、この「地域内でのインフラの意義の大きさを地域自体が強く認識しているか」の土台が、モデルを選定する際の1つのポイントだと思っています。

論点2については、前回も述べましたが、国管理のインフラをモデルとして取り上げて横展開をしていくという手法では拡張性が低いということです。民間企業や、都道府県が推し進めているインフラツアーもありますし、地整からの異動後にも継続して自分の過去のノウハウを傳承したいと思っているけれども、離れてしまって知見をつなげていけない人がいます。または、これから本気でやりたいけれども、自分の手が届く周りには知見がない人もいます。立場や所属を問わず、インフラツーリズムを「支えていく人」「運用する人」「これからつくりたい人」がつながり、そこに有識者等が必要に応じ支援をしていくことができるプラットフォームやスキームができると、国管理以外のインフラに対しても手を届かせることができる1つの仕組みになると思います。

どれだけ熱意がある人でも、例えば地方部で自分1人だけ頑張っていて、幾ら口説いても周りが乗ってこないと熱が冷めます。けれども、離れたところに教えてくれる人や頑張っている人がいて、それらとつながっているだけでも心持ちが違うと思います。これは実現してほしいなと強く思っていますので、改めて昨年と同じことをお伝えしました。

最後の「子供を対象とする」ことに関しては、インフラツーリズムという名前ではないものの、各地で4・5年生に対して地域学習の一環としてインフラを学ぶことは多くあります。資料中に「鉄道会社や航空会社、工場などでは」という例を挙げていますが、企業の産業観光とインフラツーリズムを同列に扱うことの注意点をお伝えします。一番大きく変わってくるのは、産業観光はもともと、企業のビジネスに組み込まれていることです。企業そのものや企業の製品を広報し、企業ブランドを向上させ、販売促進していくための手法として施設見学ツアーを実施しているという点です。ツアー単独で収益化したいわけではなく、見学施設を整備することも予算がつくため、現場の整備がとても整っているという点です。

もともと見学者を入れるつもりではないインフラにおいては、見学ルートの担保や、安全性の問題、バリアフリー化されていない施設も多く、特に4、5年生あたりのコアな年代を対象として、見学コースの安全性をどのように担保するのかという、大人よりもう一段階細かい安全管理というものが必要になってくると思うので、その検討が不可欠とは思っています。

先ほど、篠原先生がおっしゃっていたとおり、子どもの校外学習においては「事前学習・現場・事後学習」がワンセットになっている中で、現場や地元で教材のオリジナル部分を作る必要はあるものの、誰にも通じるベースの部分については、国交省がまとめてつくり、データ提供できるようにすることなど、省力化の支援というのはできるのではないかなと思います。

【阿部委員】

まず、論点1に関しては、先ほど来話題に上っていますように、今までの13か所の取組状況を分析、考察し、それを見ながら、継続的に検討していく必要があると思います。必ずしも答えは1つではなく、いろいろあると思います。○か×か△かみたいな簡単な話ではなさそうだと思いますが、具体のアイデアがあるということではありません。

また、例えば、ドラマ等の舞台は、放送中はその地域に人気が出て、人が来ますが、終わって

しまうと来なくなり、あたかも失敗のように言われることもあります。よく調べてみると、その時に連携した人たちが、その後、別の取組で連携したりすることがあります。モデル地区のレガシーの残し方もそろそろ視野に入れて、10年後の話というのは早いかもしれないですけども、例えば、今我々が目指しているような取組はうまくいっていないけれども、そこで頑張ったノウハウが別に生きるということもあるのではと思いました。

それから、13か所のモデル地区を通じて、インフラをどう理解していただくかというストーリー構築のノウハウというのは随分蓄積してきていると思いますが、これは論点2、論点3にもつながる重要な内容だと思います。専門家ではない人あるいは専門家に向けて、どういう視点でインフラを説明していくかというのがとても重要だと思います。

論点2の土木広報に関しては、篠原先生がおっしゃるように、これまでと別物ではなくて、インフラツーリズムの枠の中でターゲットが違うという話ですので、先ほどお話ししたストーリー作りの中で、目的別にやっていくということが大事だと思います。

3番目の子供向けの話ですが、自治体の方とお話すると、土木職不足というのは非常に深刻で、全然人が来ない。多分、民間企業は、見学を通じて自分の企業に利益が回ってくることを意識して、一生懸命実施しているのかもしれませんが、インフラの場合は、そういう観点ではなく、インフラへの理解という話であり、同じ枠では扱えないと思いました。

一方で、探究学習もそうですけれども、土木の教え方については、ダムがあります、水をためて水害を防ぐうえで大事ですという単純な役割の話というよりも、もう少し地域をどう経営するかという観点から、そのためにこのインフラが必要なのだという、インフラ施設への理解を深める教え方がまだまだ足りないのかなと思っています。

探究学習の内容に関しても、そのものだけではなくて、地域経営の視点からちゃんと伝えていかないと、インフラ単体に対してはすごく理解が深まるけれども、例えば、それが自分が将来こういう仕事に就こうというモチベーションまでたどり着かないというのはありますので、しっかりと検討する必要があるかなと思いました。

【河野委員】

地域経営という観点でいえば、災害が起こることを想定してインフラをどう整備しようとか、各家庭では例えば水をためましようとか、災害というものをフックとして、だれがどういう行動を起こすとかいう好影響・悪影響がある、ということを学ぶ、災害とインフラを絡めたカードゲームのようなものがまだないようでしたら、開発してみてもよいのではないかなと思いました。全国共通のキットにすることもできるかもしれません。

【阿部委員】

そういう趣旨では、砂防はすごく教えやすいと思います。湯沢に町ができるのも、昔から苦労していたけれども、砂防施設ができたおかげで変わったんだというような話し方ができる。下水道管もそうですけれども、インフラが見えないと、身近ではない、遠い話になってしまうので、それを見せて、伝えるというのもインフラツーリズムに取り組む上で大事だと思います。

【清水座長】

何を検証しようと思って社会実験をやっていたのかというところが、担当によってぶれるというところが最大の課題だなと思っていました。

例えば、上位10%のすばらしいところを盛り立てるという目的だったら、そのやり方があります。中下位、下位はなかなか難しいので、上中位や中位ぐらいにある一番のマス層をもっと

盛り立てるということであれば、それに適したやり方がありますが、今はそこが整理されないまま両方を支援していて、結局、どうしても成功しやすいのは上位、もう既にやっているところ、という評価にしてしまったら、それは違うんではないかと思いますよね。

なぜなら求められているものが違うし、立ち位置も違う。それを、さっき阿部先生がおっしゃったように、〇×だけで簡単に判定するものでもないでしょう。私は何回か申し上げましたけれども、そもそも、最初に何を検証しようとするのかというのが曖昧だったというのが最大の反省というふうに思っています。

そういった意味でいうと、うまくいかなかった事例があったとして、なかなかしんどいよねとなったなら、そういうものはここでのフレームで取り扱わないのかということになりますし、ちゃんと何を検証するのかと言う点を議論しないといけないと思いました。

それから、もう一点。教材や、カードゲームのようなものは、小学生や中学生向けに、観光地ベースでも独自のものがかなり作られており、すごくいいものがたくさんあります。インフラは、多分単体としては売れないので、地域経営や防災という中の1つのマテリアルとして、ほかのものとうまく組んで入っていくようにするといいいのではと思います。

本当はもっと見せなきゃいけないインフラもアクセスが遠いと、結局、都会の中学校、小学校に近いアクセスがよく、きれいないいところしか見せられないみたいな感じになってしまうと、それはまたそれで違うような気もするし、そこら辺のトータルデザインをしっかりと考えていかないけないというのが私自身の今日のいろいろな議論の気づきです。

【篠原委員】

現場のモチベーションを上げるために、インフラツーリズムに取組めば評価されるんだという仕組みが必要です。原局が実施しているような水源地活性化会議など、この取組に非常にマッチしているのに、お互い情報が入っていない。評価をしていくような話も含め、もう一度、事業設計を整えていくべきだろうと思いますということです。

それから、来年度に、新しい地区もどんどん増やしていかないといけない。モデル地区の取組が切れてはいけないと思います。

上信越道で岩盤除去工事やっており、先日、モニターツアーを実施しているという話は伺っています。この工事也非常に技術としては高いものだし、見せる内容はあるわけですよね。

また、河野委員が話をされたように、国以外のインフラへ大きく視野を広げていいのか悪いのか、この議論は毎回いただいておりますが、結論は出ていないように思います。当面、これは国の施設をベースにしていくということになりますかね。

【公共事業企画調整課長】

国でなくても、県や民間でも、より生活のなりわいの中に溶け込んで、明治、大正、昭和から機能を発揮しているインフラがあります。インフラの観光だと思わずに体験されているものもおそらくあると思います。もう少しそういう点に着目し、どんなものが今町なかや全国にあるのかというところは見てみたいなと思っております。

あわせて、13のモデル地区も、芽があると思って選ばれていますので、まだ物足りないようなところについても改めて、いろいろなものを見た上で、ここの部分はこういうところが足らなかったのかなとか、そんなことを振り返られればいいと思いました。

【篠原委員】

関西電力が富山県と一緒にやっているキャニオンルートに先日行ってきました。そうしたら、

その岩盤が落ち込んだりもう駄目で、3年ぐらいかかるだろうということなんですけれども。あの辺なんかも、相乗りしながらガツンといろいろノウハウを入れていったら、相当インフラツーリズムとしてうまく行くのではと思います。

【河野委員】

キャニオンルートは、あと一か月で開始できるというところまでガイドも育成し安全管理マニュアルも策定し、全部準備した後の地震でした。雪解けの後には本当は実施するはずでした。

【篠原委員】

ぜひ、来年度の具体的な候補地、これもしっかり考えていかないといけないと思っており、またちょっと御相談を後でさせていただこうと。

【アセットマネジメント企画調整官】

来年度については、条件例やポテンシャル、狙いや検証項目を整理して、候補を洗い出したいと思っております

【河野委員】

モデル地区の選定では、これまではほぼ対象地が決まってからの報告でしたが、本日の議論であったように、これまで取り組んできたことの検証というのがまず先にあって、それを基に次は何を目指し、そのためになぜ、どの地域を選ぶのかという議論のステップを踏んでほしいと思います。これまでのモデル地区では、現地の体制の課題が、委員が視察に行ってから判明することも多くあったように感じます。申請書だけではなく、事前に現地の状況がちゃんと分かった上で、決めるように、丁寧さは担保してほしいと思います。

それによって例えば少し選定が遅れて、無理やり短期間で卒業させるという話ではないと思うので、全体のスケジュールも踏まえた中で、改めて一緒に考えていければと思います。

【篠原委員】

令和5年度は、モデル地区を夏に選定し、秋口から動きましたが、ほぼ1年間を有効に使えなかったと思います。丁寧さということはもちろん重要ですが、スピードをあげて巻き返し、時間をかけずに丁寧にやろうということで、ぜひお願いしたいということでございます。

【アセットマネジメント企画調整官】

委員から今現地の状況など分かるようにという御意見もありましたので、そういったところも検討した上で、スピード感をもって取り組んでいきたいと思っています。

【清水座長】

代わりにまとめていただきましたが、私も同等の意見を申し上げようと、ぜひお願いをします。

あとは、選ぶときはもう少し公明正大に。我々も事前に選んで本当にいいのかどうかというのを確認する仕組み、例えば、少なくとも、実施する前年度後半にノミネートしてもらって、評価するというようにしないといけないですね。その時は、戦略的に当該年度の採択目的や採択対象はこういうものを条件としますと、いうことをちゃんと議論してもいいと思っています。同じインフラの種類で固めてみるというのも1つの手かもしれないし、あとは、地域を巻き込むようなフレームの話もあるかもしれないし。どういうテーマで募集するのかというのは、きちんと明

示をする必要があります。現場からのボトムアップだけで選定していたらこうなってしまうということが分かってきましたので。

【清水座長】

最後にもう一点、スケジュール案を御説明ください。

【アセットマネジメント企画調整官】

先ほどの議論なども踏まえて、丁寧にかつ早めにいろいろ議論も、皆様方から再度意見を聞きながら取り組んでいきたいと思っています。

【清水座長】

異動時期でもあるので、旧体制でやらなきゃいけないことと、新体制に引き継いですぐにスタートしてもらうというところを御検討いただきたいと思います。

本日、いろいろな意見を伺いました。報告書として公表しないといけないので、取りまとめは私のほうに一任をいただいてということですのでよろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

【清水座長】

進行を事務局のほうにお返しします。

【アセットマネジメント企画調整官】

清水座長、円滑に議事の進行をいただきまして、ありがとうございました。また、委員の皆様には、長時間にわたり御議論をありがとうございました。

本日の議事内容につきましては、後日、事務局より委員に確認を行わせていただき、ホームページに掲載させていただきたいと思っています。

以上をもちまして、第14回インフラツーリズム有識者懇談会を閉会させていただきます。本日は、活発な御議論、誠にありがとうございました。